

2022. 11. 20. 主日礼拝説教
聖書：ルカによる福音書12章13～21節
『豊かさを求めて』

本日の聖書の箇所は「愚かな金持ちのたとえ」という小標題が掲げられます。「金持ち」というからには多くの財産があるはずだろうし、財産があれば当然13節にあるように遺産の問題が登場してもおかしくはありません。

しかし、当時の福音書に親しんだ人々の多くは財産や遺産どころかその日の食べ物にも事欠くありさまの人々だったことを考え合わせると、どうやらルカは「富」のことだけを語っているのではないことが分かります。

ルカがここで語る「遺産」とは本来、「わたしは誰と共に生きたのか」という問いと答え、そしてそのことの基盤となる「福音」を次の世代に自らの生き様を通して引き継いで行くという初代教会の引き継ぎ作業であったはずだというのです。

物語をみて行くと、そもそも遺産の争いはユダヤ社会では頻繁で訴訟の半数近くを占めていたそうです。その調停はユダヤ教のラビたちが行っておりましたので、イエスに調停を持ちかけるのは自然なことだったようです。

しかし、イエスは「あなたがたの裁判官や調停人ではない」と断られます。その理由として「貪欲は人に己を忘れさせる」と言われるのです。

20節に用いられる「愚かな者」とはギリシア語で「アフローン」と言うのですが、この言葉は旧約の昔からイエスの時代に至るまで「偶像崇拜」のことを指しました。それは他の神々を祭るという本来の意味から、ローマの支配により貨幣経済が浸透し始めたこの時代では「守銭奴」のような連中が初代教会の奥深くまで入り込むようになっていたことが分かります。

ですから、ルカは以前学んだ11章37節以下で「形式主義」を、12章1節以下で「偽善」を、そして今日の箇所ですら「貪欲」について記すのです。

このように次々に流入してくる世俗の価値観に対して初代教会は「外」ばかりでなく「内」に対しても闘いを余儀なくされました。そこでルカが選んだのは「福音の質の確認」でした。それは観念的な物言いや、押しつけがましい規定ではなく、誰にでも分かり易い日常生活の一コマを提案して「共に考える」とい

う手法だったのです。簡単に言えば、神による「豊かさ」とは何なのかという問いと答えなのです。

「ある金持ち」は畑が豊作という出来事に際し、いくつかの選択があったろうに、自分だけの財産として蓄える方を選びました。豊かになったのです。しかし、その豊かさは「命」とは別の豊かさでしかなかったのです。彼はそれに気が付きませんでした。その豊かさを享受する間もなく、その男の命は返還要求されてしまいました。イエスは「自分のために富みを積んでも、神の前に豊かにならない者はこのとおりのだ。」と語ります。

この男も、財を成すくらいですから、約束は果たす、時間は守る、礼儀は正しいし常識をわきまえ、人に迷惑をかけずに几帳面という間違いのない生き方をしていたのかも知れません。それが突然降ってわいたような財産に心奪われただけだったのでしょう。

しかし、わたしたちは命を与えられ、多くの人々の支えによって生きているのです。むしろ、心を外に開いて、感謝しつつ、思いやりつつ生きればそれで十分なのです。間違いのない生き方をすべきであると思込みがちですが、本当はそうではなく、間違いのある者同士が支え合いつつ生きることこそ願うべきでしょう。それが「豊かさを求めて」生きることなのです。